

撮って楽しい あげてうれしい
残してためになる写真を



紅露 儀一さん
(66歳・桑野町)

「サラリーマン時代に友人と登った北アルプスから見た夕景に心を奪われ、写真の世界に引き込まれました」。以来、20年余り山の写真を撮り続けた紅露さん。新聞販売店を継いでからは地域にカメラを向けてきました。「いろんなジャンルの写真を撮り始めてから、いっそうおもしろくなりました。私の写真は芸術的というよりも素人好みの写真です。あまり技術を駆使せず、撮られた人に喜んでもらえる写真が撮れたらと思っています」。談笑する客室には、気さくな人柄が表れた作品が数多く飾られています。

紅露さんは、長年撮りためた写真を大切に保管しています。「明谷幼稚園が建っていた頃の写真がほしいという方がいて、撮っておいた写真をあげたらとても喜んでくれました。残しておけばいつかは役に立つ。そんな思いもあって、街並みや建物の写真も残しています」。撮って楽しい、あげてうれしい、残してためになる、そんな写真ライフを送る紅露さんのおすすめは、「雪景色でしょうか。特に、雪化粧したお寺は風情があって魅力的です。昔は、年に5、6日は雪が積もる日がありましたが、これからは貴重になるかも。『正月の神事』『駅伝』『シラスウナギ漁』『梅や椿』もおすすめです。いい風景は意外と身近なところにあるもの。気づきを大切に、たくさん作品が集まればいいですね」。

刻々と表情を変える自然や
地域の営みを残したい



埴淵 節子さん
(67歳・羽ノ浦町)

「ファインダーをのぞいて構図を考えているひとときが楽しくて」。友人から借りたカメラのシャッター音にひかれ、15年前に写真を撮始めた埴淵さん。「朝焼けに染まる中林海岸の景色が好きで、よく通いました。当時の写真には美しい砂浜が写っていますが、度重なる台風の襲来で砂は削り取られ、当時の面影は残っていません。自然は刻々とその表情を変えるもの。地域行事も同じです。そんな自然や地域の営みを写真に切り取っておくことで、記憶を未来に伝えることができます。行く先々で出会った感動を思い出として残せるのも写真の魅力の一つ。自分が病床に伏したとき、写真が自分を励ましてくれるような気がしています」。

やさしい口調で写真の魅力に触れながら、こう続けました。「写真の世界に“撮って極楽、見て地獄”という言葉があります。燃え盛る紅葉に感動してシャッターを切ったはずなのに、写真からは少しも感動が伝わってこない。どう撮れば、心に響いた感動を写真で表現できるのか…。写真の難しさであり醍醐味といえます。心も風景も殺風景なこれからの季節は、花のたよりを待ち焦がれる季節でもあります。『だるま朝日』『那賀川に映り込む朝日』『渡り鳥』もおすすめ。心に響く写真が撮れたら、ぜひ応募してみてくださいね」。

写真は一期一会の記録



山下 助信さん
(73歳・富岡町)

「1日2,000枚撮っても、これと考える写真は2枚か3枚。それでも帰ってからパソコンに向かうのが楽しみで。」と、にこやかに語る山下さん。県美術展に挑戦し続けて21年、友人から教わった高度なパソコン操作も習得し、作品づくりに没頭する日々を過ごしています。

「写真はピント、露出、構図で決まると思います。魅力的な風景を探すときは“太陽に向かって歩け”が基本。人物は、順光よりも斜光で撮るとより深みのある写真になります。冬場の太陽は高度が低く、大気層を長く通るため、光が赤っぽく見えます。特に、朝夕の陽光は美しく、その光を利用することで、より魅力的な写真を撮ることができるでしょう。草花を撮るときはマクロレンズを使うとダイナミックな写真が撮れます。LEDの光を撮るときは夕暮れ時が最適。人をシルエットとして入れてみるのもおもしろいかも。何より大切にしたいのは、現場でのコミュニケーションですかね」。カメラ仲間とともに、長年、その腕前を磨いてきた山下さんらしい言葉が並びます。「写真は一期一会を記録することでもあります。今年撮った風景が来年も同じように撮れるか、といえばそうではありません。その時々のお会いを大切にしたいですね。この1年間にしか出会えない阿南の風景を写真に残して、後世に伝えませんか」。

朝夕の光と影を捉えて
一瞬の感動を切り取って



福井 純子さん
(69歳・宝田町)

「どちらかといえば人物を撮ることが多いですね」。40年間過ごした神奈川県から帰郷した12年前に、本格的に写真を撮ったという福井さん。「元気なうちにいろいろな所に行っておきたい」と、週末には夫婦で出掛けて、二人三脚で写真ライフを満喫しています。

「これからの季節は『椿町のヒオオ漁』がおすすめです。県外のカメラマンにも人気のスポットで、夕日に映える四つ手網がとても美しく風情を感じます。椿泊の町並みや木漏れ日の遍路道に行く歩き遍路も情緒があっていいですね。」と、ほほえましく語る福井さん。こんなエピソードも。「香川県でのこと。中林海岸というすばらしいところがあるのに、どうしてここまで…と言われてハッと思いました。見慣れた風景には感動が少なく、そのすばらしさが見えにくくなっていることも事実。裏返せば、非日常は日常の中にもあるということですね」。そういながら、中林海岸の朝焼けを熱心に撮り続けています。「写真は光と影の世界。朝夕の陽光が織りなす光と影を上手に捉えて、その一瞬の感動を切り取ることで、深みのあるいい作品ができると思います。子どもの写真を撮るときは、おしゃべりをして心をほぐしてあげると自然な写真が撮れますよ。その場の雰囲気を楽しめるのも写真の魅力の一つですね」。

カメラはいつも持ち歩く！
写真は健康のバロメーター



撫中 健一さん
(83歳・津乃峰町)

「小さい港、風の海面、空模様、この3つの条件がそろってはじめて撮れる写真でした。きれいなあ。」と、市文化祭出展作品「遭遇」を振り返る撫中さん。雨の日以外はほぼ毎朝、カメラを持って出掛けるといふ熱血カメラマンです。ゴルフ仲間にも誘われたのがきっかけで、10年前から本格的に写真を撮りました。

「歴史が好きで、よく古城巡りをしました。北は青森、南は鹿児島まで、城跡の石垣ばかり撮ってきました。写真だけでなくメモも欠かさずとってきた撫中さん。「そうすることで記憶も鮮明に残るけん」。その熱心さはカメラ仲間も感心するほどです。

椿泊町で生まれ育った撫中さんは、カメラを持つと自然と椿方面に足が赴くといいます。「漁港に出入りする漁船や水揚げしている光景が好きでな。明かりの下で夫婦が作業しているのを見ると、ええなあって思うんよ」。長年、海の仕事に携わってきた撫中さんには、だるま朝日もまた魅力的な存在。「一口に『だるま朝日』といっても、赤、白、黄色とさまざま。50日通っても3〜4回くらいしか見れんけど、年賀状に使えたらと思って…。童心に返ったような笑顔でこんなアドバイスも。「カメラを常に持ち歩くことも、いい写真を撮る技術の一つ。それと、よう歩くけん健康にもいいですよ」。



阿南風景百選

季節は冬から春へと
最後のお願ひ：

応募期間
4月1日(月)~19日(金)



昨年4月から平成25年3月まで、1年間の撮影期間を設けて募集している「阿南風景百選」も、残すところ3カ月となりました。引き続き、皆さんのご参加をお願いします。今回は、昨年11月に開催された第41回阿南市文化祭(写真部門)の受賞者の皆さんに、日頃の写真活動への思いや「阿南風景百選」への応援メッセージをいただきました。

応募要領は市のホームページをご覧ください。
阿南市観光課(☎22-3290)へ